

6. 曾々木と鈴屋における葬儀

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤尾, 実紗 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/5020 |

6. 曾々木と鈴屋における葬儀

赤尾実紗

- I. はじめに
- II. 葬儀の流れ
- III. 考察：変化と残存の背景にあるもの
- IV. おわりに

I. はじめに

調査地である曾々木・鈴屋には、どちらにも、40年ほど前まで使用されていた、地区の火葬場がある。聞き取りを行うなかで、この火葬場の話をよく耳にした。それが使われていたころの話をよくしてくださったのだが、それだけ葬儀という儀礼が住民の心に残っていると感じ、葬儀についてみてみようと思った。火葬場は今では使用されておらず、また他の点においても時代の流れのなかで葬儀は変化してきている。ここでは、曾々木と鈴屋における葬儀について、II節では過去から現在の葬儀のやりかたとその変化を、III節ではその変化と残存の背景と、葬儀の地域社会との関わりについてみていきたい。

II. 葬儀の流れ

1. 死～遺体の処置

死者が出ると、隣人が手伝いに駆けつける。また、隣人が近所をふれまわり、人を集める。曾々木ではこの役割の人を「ふれ番」、鈴屋では「バンドをふる」と呼ぶ。それと前後して、寺への「ゴアンナイ」が行われる。これは、その家の「濃い」親戚（血の「濃い」、つまり近い親戚の意）や隣人などが、旦那寺（シュショウデラとも呼ばれる）へ「死人が出た」と連絡することで、たいてい1人で行い、仏供米（ブクマイ、ブッキョウマイ）を一升、巾着袋に入れて持参する。巾着袋の口ひもは本来ならば口にまきつけ縛るものであるが、このゴアンナイの際

はひもはくくらずそのままにする。寺へ着いたらまずお御堂（本堂）へ参拝し、その後庫裏へ行き住職に死人が出た旨を告げる。鈴屋では、寺へ着くまでは一言も声を発してはいけないと言われている。寺から戻ったら、どのような格式の葬儀にするか家人や親戚、葬儀委員長らと相談し、早いうちに寺へ連絡を入れなければならない。

葬儀は地区の中でももう一つ小さな区分、区もしくは班単位で行われる。鈴屋では江尻、中村、谷内、川原ごとで、曾々木では班ごとである。人がだいたい集まった後に役割分担が行われる。鈴屋内の三区（江尻、中村、谷内）と曾々木では話し合いの後その葬儀の責任者が決定するが、鈴屋町内では行政区長総責任のもと葬儀が行われる。

鈴屋ではかつて葬儀の最高責任者としてダイドコロオヤジ（ダイドコロゴテイ）、記帳係、香典を受け取る係りのアイサツウケ（紋付袴姿の男性。血縁の「薄い」親戚がつく）、仏供米ウケ、酒番、茶役、寺方給仕（僧侶＝「御坊さま」の給仕を行う）、使い歩き、給仕などの役が決められた。女性はほとんどが台所でまかない方（料理人）としてはたらく。今では寺方給仕と茶役が統一され、料理人の全体を指揮する役として料理長という役が設置されている。また、酒番とアイサツウケ、仏供米ウケは必要でなくなったのか、役職としては存在していない。

曾々木では、葬儀委員長／ダイドコ（ロ）オヤジを親戚のうち「濃い」者がつとめ、他の役職としては記帳係などがある。地区の火葬場が使用されていたころは、火葬場へと遺体を運び、火をつけ焼く役（6～8人）が順に地区内でまわってきたという。今では葬儀委員長・記帳などととも、亭主名代という役割がある。亭主にかわって葬儀の一切を采配する役目で、親戚のなかでも故人と血縁の「濃い」親戚の人や、亭主の兄弟がこの役に就く。ジョウ会長（区長）が補佐役としてつくが、区長が亭主名代そのものになる場合もある。

両地区において、故人の「濃い」親族（主に喪家の家人）は役にはついてはならないとされる。その理由としては、「悲しみに仕事を手につかなくなるため」「水や食べ物に触らせないようにするため」といったものが聞かれた。

役割分担・段取りが終わったら、遺体が清められる。親戚ひとりが遺体をタオルで拭く・洗うしぐさをする。これは「ミョウガン」といわれるが、鈴屋の別の事例では、故人の近い人が遺体の顔や手などを植物のミョウガで拭いていたという話もきかれたためその名残ではないだろうか。現在では故人の家族が脱脂綿などで清めるしぐさをするようになっている。

曾々木では、昔、「センソクタライ」という桶に遺体を入れ、布と湯で洗い清めた。この桶は死者が出てから桶屋に頼み、棺桶と一緒に急ぎで作ってもらった。注文をうけてからすぐに作らねばならなかったため、「ハヤオケ」とも呼ばれていた。これは、使い終わった後で海に捨てられた。

その後遺体は白装束を着せられ、北枕に寝かされる。白装束は曾々木で「ミョウガン着物」

と呼ばれる。親族が少しずつ縫い、最後は玉止めをせずに仕上げられる。以前は藁を三束用い、一束を丸めて枕に、二束を布団にして寝かせたが、現在では普通に布団を用いて寝かせている。遺体は仏間に寝かされるが、鈴屋の場合は川の流りに沿って建物が建てられているため、北枕に寝かせるといった意識があまりないのだという。方角よりも、むしろ入り口・玄関に対しての向きに気を払い、玄関に足を向けて寝かせる形が一般的である。自宅ではなく新しく会場として利用されるようになった農協の施設で行う際は、祭壇が可動式であるため棺の向きに意識が払われることもある。この農協の施設については後で詳しく述べる。

その後、入棺が行われる。昔は、丸い桶状の棺が使用されていた。遺体はひざを曲げて座り込ませ、蓋をして釘を打ちそのまま火葬にする。このときに、近しい親戚がかみそりで頭の毛を剃った。中には藁などをつめ遺体を固定し、外からは遺体の向きがわかるよう正面に札を貼った。これは、火葬の際、火をつける向きによっては遺体が棺から飛び出してしまうことがあるので、それを防ぐためである。棺の蓋には後ろから前へ「南無阿弥陀仏」または「南無大師金剛遍照」と書き、「南」の文字が遺体の頭部の上にくるようにしたという。遺体を棺に納めるときに、納めた人が着用していた着物などは火葬の際一緒にすべて燃やしてしまう。そのため、納めるときには古い着物と縄帯を着用していた。現在の棺は既製品の、一般的な長方形の棺で、顔の部分に小窓があるものが主流である。そして、髪も剃らずに、くしで整えるだけである。この状態で通夜から葬式、火葬へと遺体は移動していく。

2. 通夜～葬式

死亡したその夜に通夜が行われる。今では死亡時間の関係などで、次の日になることもあるという。僧を呼んで経をあげてもらうが、僧侶は旦那寺の小寺のほうだけが来るといふ。僧侶は経を上げ、説法をしてかえっていく。その後、会場では一晩中、そこにいる人々で交代に寝ずの番をして、ろうそくや線香をともしつづける。これは、今でも行われているものである。

曾々木・鈴屋一帯は主に浄土真宗の門徒で、通夜・葬儀の際はそれぞれの旦那寺とその小寺から僧が呼ばれる。そのほかに、葬儀の際は諷経の僧が複数人呼ばれ、大体が5人～7人程度になる。諷経とは門徒である寺以外から僧を呼ぶ行為をいう。兄弟や喪主の嫁の実家、親戚などが「諷経料」を払って僧を呼び、死者への弔いを行うものである。嫁の実家の方が、この諷経の僧を呼ぶのが礼儀とされる。人徳がある人の葬式や、広く交流があった人の葬式の場合は、この諷経の僧が非常に多く来るといふ。これはこの地域のみならず、さまざまな呼ばれ方で日本全国に見られるものである。この際に呼ぶ僧は、同じ宗派の僧である必要はなく、また嫁方の実家は遠方である可能性があるため、その家の旦那寺から呼ぶ必要もないとされる。また、諷経で呼ばれた僧と旦那寺の僧は、別にもてなすという。

葬式の会場としては、現在は家、寺院、もしくは町野町農協の健康増進施設で行われる。この農協の施設であるが、平成6（1998）年建設で、普段は高齢者のスポーツレクリエーションや保育所の運動会、婦人会の集まりなどに使用されているものである。葬式にと貸し出すようになったのは平成15（2003）年からで、たまたま、家が狭いため葬式ができないという人がいて、広い場所だから貸してくれないかということで使用されるようになったそうだ。駐車場が広く、冷暖房完備であるし、また調理の研修室があるため水周りの設備も充実していて勝手がよかったため、その後たびたび葬儀会場として利用されるようになった。さらに、そこで葬儀が行われるようになると、利用者のほうから要望が出るようになったため平成16（2004）年に簡易式の祭壇が設置された。以前はほとんどの葬儀は家で行われていたが、家で行うとなると非常におおがかりになり手間がかかる、また、新しいつくりの家屋では建具を取り外すなどによって広いスペースを確保するということが不可能であるなどの理由から、徐々に農協や寺院での式に移行してきているようだ。

葬儀本番の開始される時刻は、在所の火葬場が使用されていたころはある程度決まっていたという。鈴屋では午後二時からとされていた。火葬がすっかりすみ、骨上げができるようになるまで長い時間を要したので、その時間に合わせていたのだらうと思われる。現在では火葬場の使用予約時間に合わせて決定されているため、それぞれの葬儀ごとにまちまちである。葬儀自体は僧侶がとりおこない、真宗の形式にのっとり一時間程度で終了する。

その後、家人と濃い親戚、火葬の当番にあたっている人は火葬場へ行って食事を摂ったが、薄い親戚やその他の参列者は火葬場へはついていかなかったため、これらの人々に対しては僧とともに会場で食事が出された。現在では調理や器の手入れに手間がかかるため、仕出屋に頼んだり、会場で料理を作っても折り詰めにしてしまうことがほとんどだという。手伝いの人もその場で食わずに持って帰ることが多い。料理の種類や数は時や家の格によりさまざまであるが、食器としては「赤惣和（アカゾウワ）」と呼ばれる赤い輪島塗の膳が使用されていた（写真1、図1）。これは、葬式に限らず、祭りや結婚式などのめでたい行事の時にも使用されるものである。膳の左手奥に蓋つきの菓子椀（①）、右手奥の生皿（キザラ）に刺身代わりのトコロテンなど（②）、中心に「おへら」（③）、左手前にご飯（④）、右手前に吸い物（⑤）、手前中心にはさかずき（⑥）を配置するという形式が一般的であった。

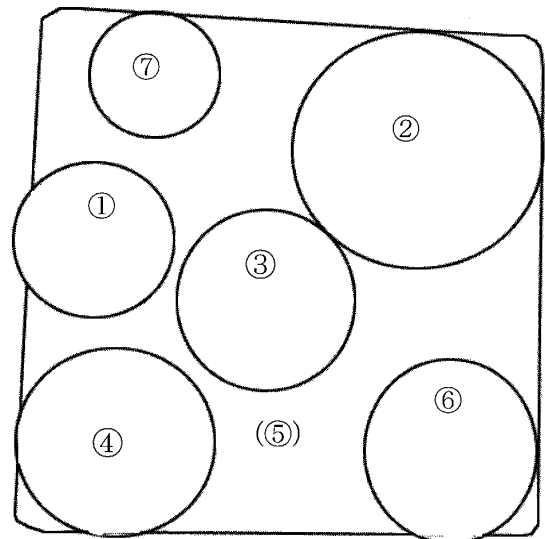
「おへら」は1~4・5種類の煮物などが乗っている皿で、具には油揚げやがんもどきなどが供されると聞かれた。菓子椀にはしいたけやたけのこなどの煮しめが盛られる。曾々木ではふきやぜんまいの煮物、ジャガイモのふかしたものなどが供されるそうである。そのほかに、まんじゅうや落雁のお菓子などが出される場合もあった。トコロテンについては、「スイゼン」をつくって食べるという家もあった。スイゼンとは、輪島で食べられている郷土料理の一つである。

海草を煮とかし、もち米と混ぜ冷やし固めた寒天のようなもので、きしめんの二倍ほどの太さの短冊状に切られる。菊花状や波状に器に盛り、ごまだれをつけて食べる。現在では観光要素のひとつとしてレストランなどで出されていたり、輪島市街の大きなスーパーで商品として販売されていたりしている。同じ地区内でもスイゼンを食べるという家とそうでない家があり、家によって違うのであろう。また、葬式の料理に酢の物などは出ない。酢は、葬式では使用されないことになっているからである。その理由については、「昔からそうになっているんだ」という答えしか返ってこなかった。酒は膳の仕上げに飲まれていたが、会場が農協へと移行して後は移動手段のほとんどが自家用車になったため、飲まれなくなった。

写真1 赤惣和 (アカゾウワ)



図1 赤惣和 (アカゾウワ)



- ・⑦: チョクワンと呼ばれる。トコロテンのゴマだれなどを入れた
- ・⑤のさかずきはアカゾウワのセット内になく、今回は見ることはできなかった

葬儀の際、塩草 (エンソ・エンゾ) という、海草やしいたけなどの乾物類が登場する。これは曾々木・鈴屋ともに聞かれた語であるが、その意味づけには以前は差異があったようである。塩草とは、葬儀の際弔問客が香典とともに喪家に持ってくるものである。出し昆布や干しいたけ、ぜんまい、わらび、野菜等があげられる。これは、四十九日の間喪家では生もの (ベンもの) を口にできないため、その間の食材として使用するのだという。以前葬式を出した際もらったものは香典帳に細かく記載し、もらった先の家で葬式があるときに香典とともにそれと

同じだけのもの、もしくはそれにみあう分のものを返す。今では現物ではなく、香典と別に「塩草代」として現金で持ってくることが多い。これは両地区とも共通して聞かれた。現在使用されている香典帳は、葬儀会社のような役目を勤める花屋が用意する既成のものであるが、その表紙には「御香典仏供米塩草控帳」という文字が印刷されていることから、この塩草はおそらく町野町一帯でみられるのではないかと推察される。しかし、かつて鈴屋では、この塩草は弔問客ではなく喪家が寺に持っていくものとしても存在していた。葬儀～火葬、骨上げまでひととおりが済んだ後に、死者の近しい親族による「ネカヅキ」と呼ばれる寺へのあいさつ参りが行われたが、そのときにお布施・米とともに持っていくのだという。具体的なものとしては焼き麩（車麩）を縄でつないだもの等があげられるが、今では、寺に持っていくことはなくなっているようだ。

3. 火葬

葬儀が済んだら、出棺、そして火葬場への移動となる。

昔は、地区内において共同の火葬場があり、30年ほど前までは使用されていたという。曾々木に1箇所、鈴屋に2箇所あり、「モジョドウ」と呼ばれていた。家で葬儀を行った後、当番の人が数人で遺体を入れた棺を担いでいった。鈴屋では4人ほど、曾々木では6人ほどということであったが、大きな輿になった場合非常に重たくなるので、6人では重たくて持ちきれないということもあったようだ。当番の人はノウヤキテ・焼き人夫・野係などと呼ばれる。

火葬場へと運ぶ際には、専用の担ぎ棒（輿）に乗せた。これは火葬の際一緒に燃やしてしまうため、棺桶をつくるときに一夜で一緒につくる。鈴屋では桶の上に屋根があるものもないものの二種類がきかれた。あるものは「ヒヨイ」と呼ばれ、紙で装飾がされている。屋根がないものには棺の上から袈裟をかぶせた。この袈裟の値段により式全体の格（式の内容・料理の内容・お布施の金額など）が決まったという。袈裟は火葬場から帰る際、焼かずに持ち帰った。今でも袈裟によって葬式の格が決定され、火葬される直前まで棺桶の上に袈裟がかけられているようだ。

曾々木では、桶の上にみこしのような屋根をつけ、すだれや房などで飾りつけをした。四方屋根の四隅には火の玉が飾られた。棺の下には台があり、それが一重台か二重台かによって式全体の格が決まった。ちょうちんをつけた竹を持った子供が先導し、担ぎ棒の後ろにつながったひもに親類縁者がつながって火葬場までいったという事例もある。大きな葬式（ダイのお葬式）が行われる際には立派な屋根がとりつけられ、ガンブタとも呼ばれていた。また、鈴屋と同様に曾々木でも「ヒヨイ」という言葉が聞かれた。ここでは輿の状態に関連するのではなく、輿自体を「ヒヨイ」と呼んだようである。担ぐ意味の「ショイ」から変化した言葉ではないだ

ろうか。

火葬場に行くときは新しいわらじを履き、帰りにはそこで脱いで足袋のまま家まで帰ってきた。葬儀の際に使用した、白紙を細長く切り、細い棒などに螺旋状に巻きつけたシカ（紙華、死華）などの飾り物も持って行って、一緒に焼いたという。鈴屋では濃い親戚がついていき、曾々木では薄い親戚や弔問客も火葬場までついていった。焼く係に当たっている人以外は、火をつけたらいったん家に戻り、そこで食事を摂った。焼き手は遺体が完全に燃えてしまうまでそこでついていなければならなかった。ある程度の時間がたったころに、「焼け見舞い」「骨（コツ）見舞い」「火葬見舞い」などと呼ばれる差し入れがなされる。いったん家に戻った側の人が、白い着物から黒い着物に着替え、当日作った料理とおにぎり、酒などを持って火葬場へ再び行き、焼き手をねぎらうものである。遺体がすっかり焼けたら焼き手は各々家に戻り、次の朝になってから家人や親戚が骨上げに行く。これは、焼けた直後は非常に高温になっており、骨を拾うことが困難であるからである。

今では輪島市中心部に火葬場ができたため、火葬場から大きなワゴンが迎えにきて、遺体を載せた霊柩車とともに大人数が火葬場へとついていく。ほぼ100%そちらの利用になっていて、実際に地区内で遺体を火葬することはないという。輪島市の火葬場へ行く際、作った料理を折り詰めにし、ご飯はおにぎりにして持参する。火葬の間にそれを参加者で食べ、遺体が焼けるのを待つのである。

遺体が焼け、骨になったところで骨上げを参加者で行い、骨箱に入れて家に帰ってくる。この骨箱は花屋が用意してくれるもので、白木の箱を紙で包んだものである。

4. その後の法要など

家に戻ると、ハイソウのお参りと呼ばれる法要が行われる。床の間に三段ほどの簡単な祭壇を設け、そこに遺灰を置き、経を上げるものである。故人の写真が遺骨の横におかれ、左右には回り灯籠が飾られる。ここで使用される祭壇は、今ではダンボール製の簡単な組み立て式のものが使用されている。祭壇・灯籠ともに、四十九日の精進が明けると処分される。

その後、寺へ義理参りが行われる。鈴屋ではネカヅキという呼び名もきかれた。これは、故人の子供たちが葬儀の費用を持って寺へ行き、本尊に参拝するものである。

その後、初七日は葬式当日を含めるため六日目に、その後は七日ごとに僧がやってきておつとめが行われ、四十九日をもって精進明けとなる。百か日の法要以外は親戚が集まり、法要がなされる。精進の期間（四十九日まで）は「ベン（＝ケモノ類）」は食されない。「魚気」（サカナケ）という言葉がきかれたように、肉類というより魚類に注意が払われるようである。お菓子などに入っている魚介類にも気を払うという方もいた。また、近年の変化としては、その期

間を三十五日に短縮している事例も聞かれた。

III. 考察：変化と残存の背景にあるもの

前節までで、過去と現在の葬儀について見てきたが、ここには変化したものと残存しているものが入り混じって存在していることが見て取れる。時代の変化に伴って生活様式が変化し、また習俗も変化していくのだとってしまうことも出来るが、ここではその変化の具体的な背景を考察してみたい。

まず、大きな変化としては火葬場が地区のものから輪島市の公営施設に移行したという点があげられる。この火葬場は昭和43（1968）年に営業開始している。今回の調査でも、何年前頃まで地区内の火葬場を使用していたかという質問に対して「35年か40年くらい前までは使っていた」という答えがよく聞かれた。この頃から、地区の火葬場から公営の火葬場へと使用が移行してきたのだろう。これに伴って、地区内の住民で行っていた遺体を焼く係が不要となり役割の負担は軽減され、また棺も桶状のものでなく規格品の長方形のものへと変化した。担ぐための輿（ヒヨイ）は、霊柩車の登場で必要がなくなり、その姿を消した。

また、葬儀の会場も大きな変化であろう。家から寺院や農協の施設になったと前でも述べたが、建物のつくりなどから広いスペースを確保することが物理的に困難になったことが原因の一つとしてあげられるであろう。会場が集落内の家であれば弔間は物理的に容易だが、会場が自宅から少し離れた農協になると、弔間に行くためには自動車などの移動手段が必要となった。そのため、移動手段を持たない高齢者の方からは行きたくても行けないといった声もきかれた。

その他には、四十九日の精進期間を三十五日に縮めている事例がよく聞かれた。理由としては、仕事の関係などということがきかれたが、ここにもやはり全体的に簡素化・簡略化の流れがみられる。

これら、時代に伴い様々な面で変化は生じているものの、その変化は柔軟に、そしてゆるやかに受容されている。「農協が使えるようになってだいぶ楽になった」という声もあった。Kさん（70歳代女性）の話では、「時代の流れだからどうしようもない」と受容しながらも、一方で、「自分の時はここ（自宅）で葬式をしてほしいと思うが、自分が死んだ後葬式をあげるのは私ではなく子供たちだから、そのときに口出しはできない」と、寂しさや不安も口にされていた。

一方で、その姿は多少変わっても残存している要素もある。そのなかでも私が注目したいのは、葬儀会社の介入があまり見られなかったという点である。祭壇や飾り、香典帳の手配など

を一手に引き受ける花屋は存在するが、それはあくまで必要な品物などの物質的な面での提供にすぎず、実際に葬儀を取り仕切るのは、地域の人が受け持つダイドコロオヤジや葬儀委員長である。また、会場として比重の大きくなってきた農協は場所の提供をしているのみで、職員が何かかかわっているということはないようだ。

昭和30年代からの高度経済成長期を経て、日本は全国的に合理化の風潮に乗ってきた。そのなかで、葬儀という儀式も市場原理に組み込まれ、葬儀会社が介入するようになり、地域コミュニティがそれまで担ってきた役割を葬儀会社が負担することで、手伝いに必要とされる労力が軽減されてきた。自宅で行う互助的な葬式は、住宅事情や近所との関係の希薄化などにより衰退してきている(森 2000: 183-188)。葬儀のしきたりも、時代の流れに伴って簡略化・簡素化の傾向にあるなかで、喪家や親戚以外の地域住民が提供せねばならない労力の絶対量は明らかに減少しているはずである。しかし、今回の調査地である曾々木・鈴屋では、多少の簡略化はみられるものの、共にまだ互助的な葬式のありかたが残っている。曾々木・鈴屋共に、戸建の家が多く昔からの顔なじみが多く住んでいるということも一つの原因であろうが、地縁的なつながりが失われず残っているためであろうと推察できる。実際に平成16(2004)年に鈴屋で行われた葬儀の役割分担表を見せていただいたが、ほぼ全戸から手伝いの人員が出ており、ダイドコロオヤジや記帳などといった分担もきちんと行われていた。

また、葬儀会社が、飾り物や祭壇など物の調達という業務から、葬儀の進行などを取り仕切るような業務へとその領域を拡大していったことで、葬儀の形式についても、関西・関東などのおおまかな区分による風習の違いは残されたが、徐々にパターン化されていくようになった(横山 1985: 142)。しかし、曾々木・鈴屋においては、地区の構成員が指揮を取ることからみられるように、地区の中で葬儀のやり方が受け継がれてきていることで、葬儀会社が介入することによる葬式の全国的な均一化を結果的に避けることにもつながってきたといえるだろう。

曾々木・鈴屋共に、少子高齢化の進行しつつある地区である。若い人はその多くが輪島市中心部や金沢をはじめ、地元から離れた地域へと働きに出ており、少子化に一層の拍車をかけている。その中で、今回見られたような地区内の互助的システムを担う次の世代は育っていくのであろうか。まだ、今の段階では今後衰退していくであろうとも、継続的に受け継がれていくであろうとも断定することはできない。地域の繋がりのなかで継続されていくのかもしれないし、もしくは葬儀会社のような地域外の力の介入が今よりも大きな比重を占めるようになっていくのかもしれない。しかし、現在の曾々木・鈴屋両地区においては、この互助的葬式のシステムが地区内の結びつきをゆるやかながらも保持するための一要素として働いているように見える。

これら、葬式における変化と残存の持つ機能が、これからも葬儀のみならずその他の地域生

活においても重要なものとなっていくのではないだろうか。

IV. おわりに

時代の変化に伴って、葬儀の形式も少しずつ変化してきている。簡略化・簡素化されてきた面も少なくない。しかし、今回の調査の中では、まだ地縁にもとづく互助的な葬儀の形式が残っていた。高齢化の進行やその他の影響下で、今回みられた葬儀形式がこの先どうなっていくかは分からない。だが、この互助的な形式から得られる人との繋がりの実感というものは、個人化が進む現代において、コミュニティが存続し、またそのなかで人が生きていく上で、大切にしなければならない要素の一つであろう。

人はいずれ死んでいくが、その先は誰にもわからない。そして、死んだ後この世で弔いをするのはあくまで遺族であり、その弔いがどのようになされるのかも本人には全くわからない。しかし、生きているうちに他者の弔いをしたり、また弔われている人を見たりする機会は多かれ少なかれある。そのなかで、いずれは自分の番がやってくる、と思ったときに、このような互助的な葬儀システムがあれば「自分の死んだ後はきつときちんと弔ってくれる」という安心感となり、多少なりとも死への不安を薄くすることができるのではないだろうか。